

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 2	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
<p>A cross-sectional study of alcohol drinking and health-related quality of life among male workers in Japan.</p> <p>日本の男性労働者におけるアルコール摂取と健康関連クオリティ・オブ・ライフについての断面研究</p>	
執筆者	
Saito I, Okamura T, Fukuhara S, Tanaka T, Suzukamo Y, Okayama A, Ueshima H	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Occup Health. 2005 Nov;47(6):496-503.	
キーワード	
アルコール摂取、断面研究、健康関連クオリティ・オブ・ライフ、自覚的健康、SF-36	
要 旨	
<p>軽度、中程度のアルコール飲酒は循環器疾患や死亡率を減少させることが知られており、自覚的健康が比較的、良いと言われているがこのことはよく調べられていない。飲酒によるこれらの健康への影響は高密度リポタンパク質や血小板凝集性の修飾、フィブリノーゲンレベルの減少によるものと説明されている。青・壮年者を対象とした生活習慣病予防のための長期介入研究である high-risk and population strategy for occupational health promotion study (HIPOP-OHP) によるデータをもとに癌や循環器疾患の既往歴のない25歳以上の4521名の日本人男性労働者を対象として、アルコール摂取と健康関連クオリティ・オブ・ライフ (QOL) についての断面研究が行われた。健康関連 QOL は「健康調査 SF-36」を用いて調べられた。SF-36 は8つの健康概念を測定するために複数の質問項目から構成されている。8つの概念には (1) 身体機能、(2) 日常役割機能 (身体)、(3) 身体の痛み、(4) 社会生活機能、(5) 全体的健康感、(6) 活力、(7) 日常役割機能 (精神)、(8) 心の健康が含まれている。SF-36 は国際的に最も普及している健康関連 QOL 尺度であり、全国調査から得られた国民標準値が設定されている。今回は8つの概念のうちの日常役割機能 (身体)、全体的健康感、活力、日常役割機能 (精神)、心の健康の5つの概念について調査を行った。飲酒をしない人に比べて、1日当り 1.0-22.9 g (アルコール換算) のアルコール摂取では日常役割機能 (身体) と全体的健康感のスコアが高かった。また、飲酒量が減少するに従って、活力のスコアが減少する傾向が見られた。日常役割機能 (精神) についてはアルコール摂取との関連は見られなかった。アルコール摂取をしない人と比べて、アルコールを週 5~6 日摂取する者では日常役割機能 (身体) と活力のスコアが高く、週 1~2 日摂取では活力と心の健康のスコアがより良い傾向にあった。年齢、配偶者の有無、労働時間、仕事での運動量、自己申告での仕事上のストレス、喫煙状況、定期的な運動、高血圧、高脂血症や糖尿病の既往歴等で調整を行った場合も全体的健康感以外の項目でのこれらの関連はほとんど変わらなかった。以上より、SF-36 の5つの項目において、自覚的健康と飲酒パターンの関係が変化することがわかった。また、アルコールを摂取しない者と比較して、アルコール摂取者は比較的、健康状態が良いと格付けされることが示唆された。</p>	